

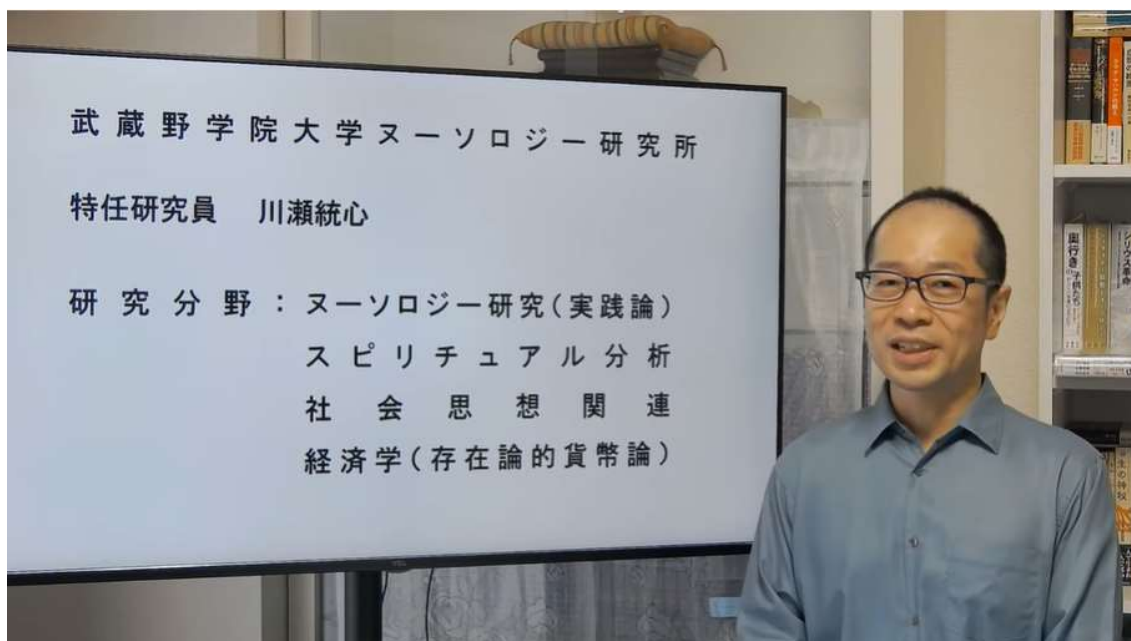
【武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所】研究動画シリーズ#004(川瀬)(2022/05/12 uploaded)

【武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所】研究動画シリーズ#004(川瀬)(22:57)

<https://www.youtube.com/watch?v=59AKeXSkp6c> (2022/05/12 uploaded)



みなさん、こんにちは。武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所、特任研究員の川瀬統心と申します。初めての投稿になりますが、以後よろしくお願い致します。



また、並行して経済学、特に、貨幣論を今研究しております、ヌーソロジーの文脈に沿って、ヌーソロジー的な貨幣論としての存在論的貨幣論というものを追いかけております。こちらの成果に関しても、追々こちらで、少しずつ発表させていただきたいと思いますので、今後ともよろしくお願い致します。

**Research
Announcements**

#004

理性と信仰の一致を見出すヌーソロジー 前半

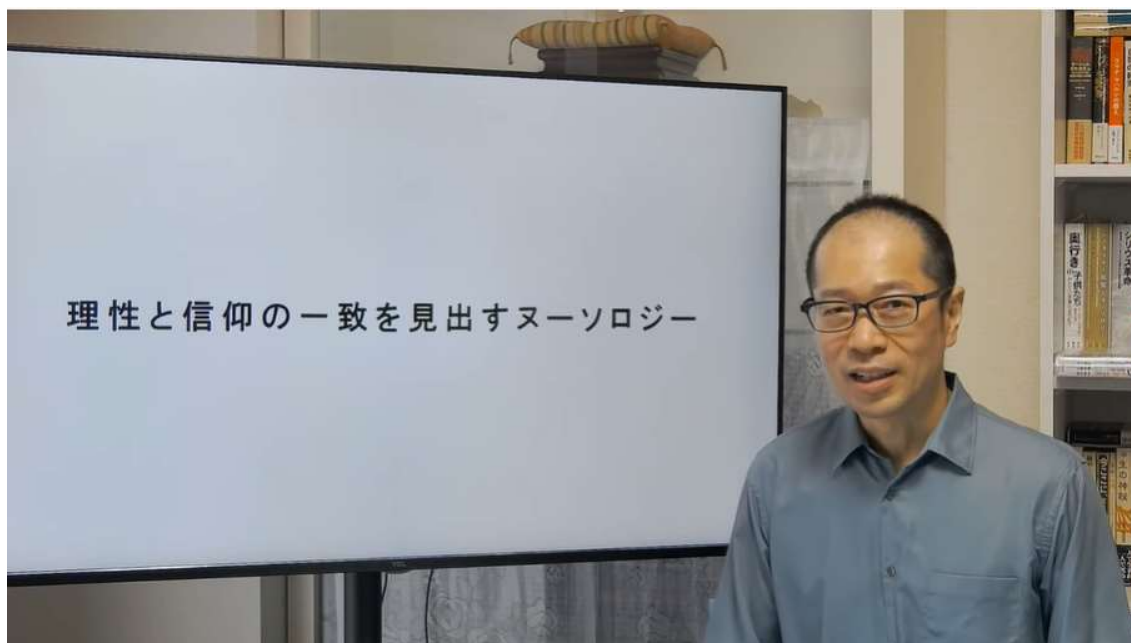
 武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所

announcer 川瀬 統心

理性と信仰の一致を見出すヌーソロジー 前半

川瀬 統心

さて、第1回目の私の投稿ですが、本日はこのようなお題でお話しさせて頂きたいと思います。

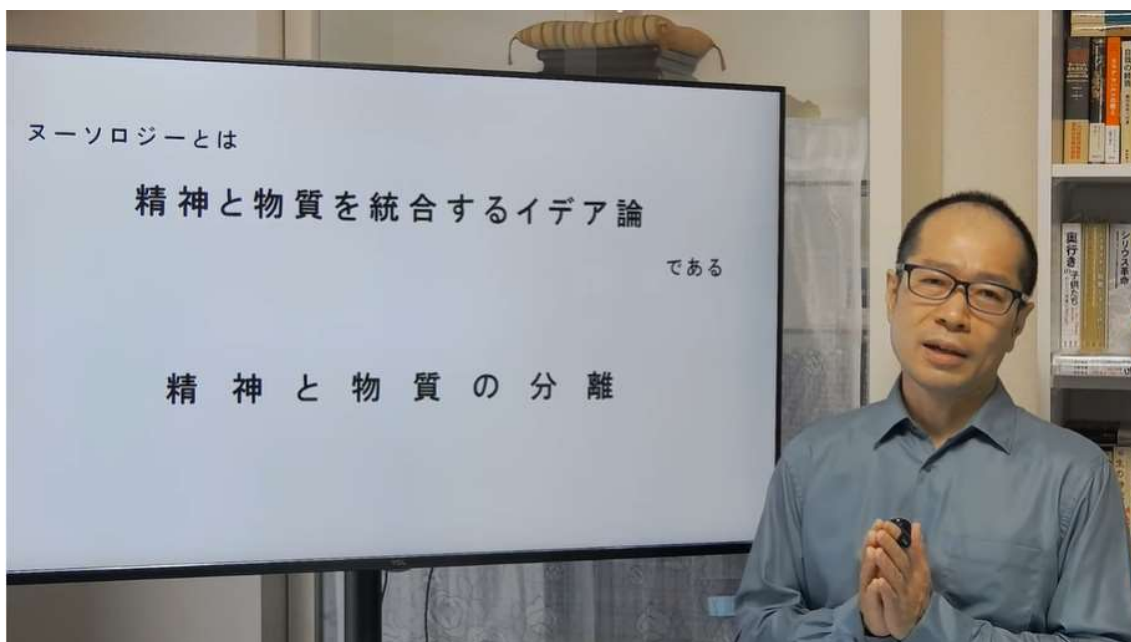


「理性と信仰の一致を見出すヌーソロジー」

と題してお話ししていきたいと思います。まあ何やら、このね、理性と信仰なんていう言葉が出てくるこの辺りが私のジャンルならではのことではないかと思うんですが、最後までお楽しみ頂けたらと思

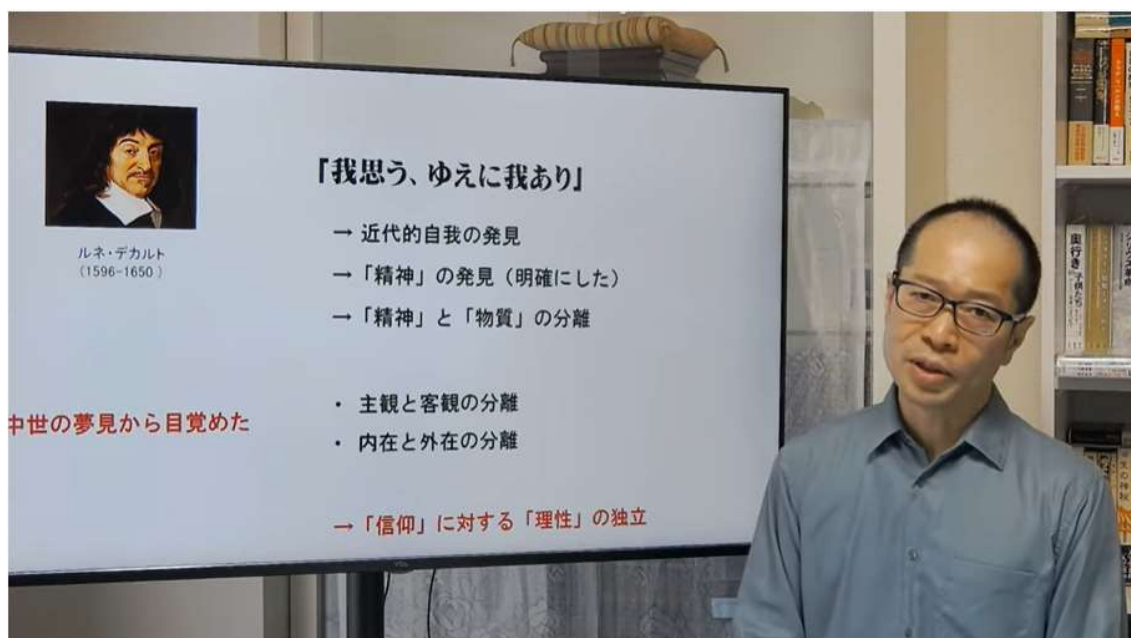
います。それではですね。

まず、「ニューソロジーとは 精神と物質を統合するアイデア論 である」と言われております。精神と物質の統合。それで、この精神と物質の統合ということは、その前提には「精神と物質が分離している」ということが前提になっているかと思えます。



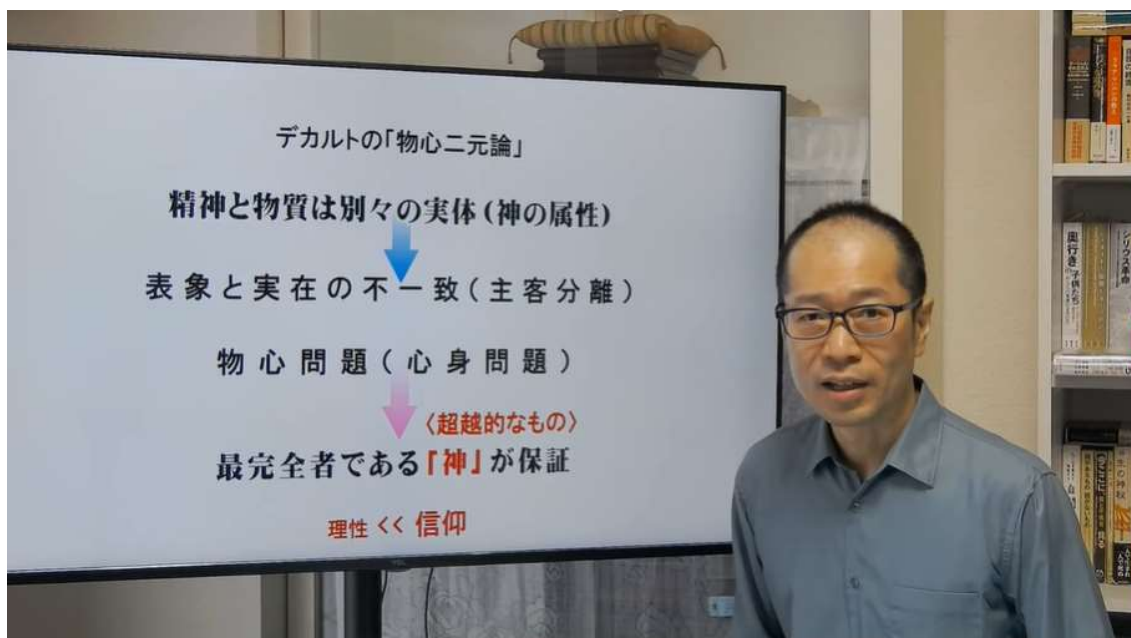
精神と物質の分離と言えば、やはりこの方。この方がその一つの契機になったということは、ご存知かと思えます。デカルトですね。「我思う、ゆえに我あり」という中世から近代へ、「近代の哲学の父」であるデカルトのこの言明であります。確かな知識を得たい、確かな真理を探究したい。デカルト以前においては真理とか真実を探求する。それは信仰が信仰によってわかる、信仰の方が力に強かったわけですね。そこところが、その信仰においても宗教改革、宗教宗派の争いとかですね。いろいろな内部の腐敗とかいうものが現れてきた。そして、同時に、当時、少しずつ自然科学がここで勃興してくるわけですが、それによって理性の力が信仰から徐々に発達してくるというような中であって、信仰によって真理を見出すというところから、理性の力によって真理を見出すという方向性が色濃く出て来た、その契機になった方がこのデカルトであるということは間違いないでしょう。で、そのデカルトはすべてを疑う。そのすべてこの今私のこの意識すらももしかしたら夢見ではないかとそこまで疑う。デカルトは数学者でしたが、その数学的な真理、明らかに明証といえる数学的真理でも神によって合わされているのじゃないかとそこまで疑い疑い疑い尽くした果てに残ったのが「疑っている当の自分は疑いようのないものであった」ということで、これこそ明証なるものを求める真理を、真実を求める学問も、人間のそういう活動の探究において、ここからスタートしなければならないというのがこの「我思う、ゆえに我あり」という言明であったということですが、これは後に「近代的自我の発見」と呼ばれました。ここから近代的な自我が発見したと言われますね。そして、この自我の発見、自我の発見というのは、それは同時に精神の発見でもあることができます。

精神が明確になってきた。それはとも同時に精神と物質というものをはっきりここで分けるようになってきたと言えるのかなと思います。精神が発見される。それはその外側にある物質というものも明確になってくる。そして、このデカルトの自我の発見によって、その後、主観と客観も分離していく。見るものと見られるものの分離、内側と外側の分離ですね。内在と外在が分離していくということが起こってきたのであります。これはそういうことなんです、結局、先ほど言いました、信仰によって真理を見出せていこうとする、そのような中世のキリスト教がまだまだ支配的であった、そういう宗教的な世界観・価値観・信仰が中心であった、そういう時代観から、いよいよ人間の理性が独立してきた、そういう段階と言われていますね。それがデカルトによる近代的自我の発見でありました。まあ言ってみればちょうどね、中世の夢見のような状態から人間の理性が目覚めてきた。夢から目覚めてきたその奥行きに当たる、そのような重要なデカルトの立ち位置ではないかと思えます。



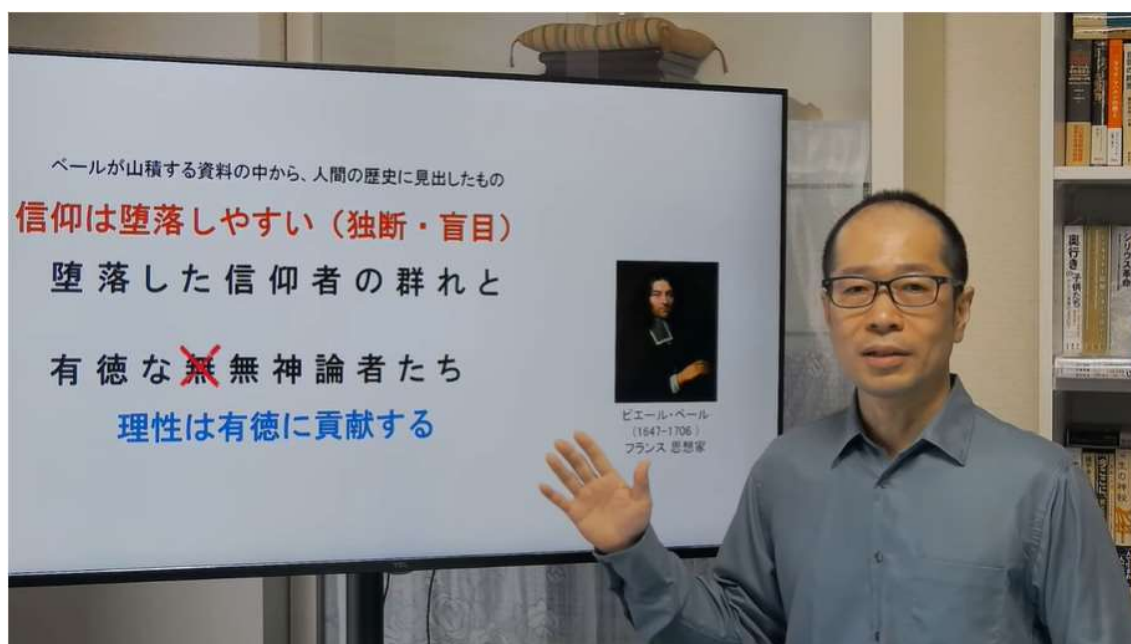
さて、そのデカルトによって、精神と物質が分断されたと言っても過言ではないと思うんですが、デカルトにおいてはですね。というのも精神と物質はそれぞれ別々の実体として定義されたわけですね。デカルトにおいて、これは神の属性、絶対的な神、完全なる神の属性としての精神、思索を中心とする精神と、そして、その幅を、延長を本質とする物質ということで、精神と物質がそれぞれ別々の実体として分かれてしまった。そのことが何をもたらしたかと言うと、そこから事は収まるのではなく、そのように、内側の精神と外側の物質として分けてしまうと、要するに、表象と実在の不一致問題というものが出来て来ます。主客分離のことですね。要するに、今私が感覚化している、見ている感じているという、この様々な私の目の前に現れている表象ですね、それが果たして実在と本当に一致するのか。私がリンゴを見ているとしたら、そのリンゴの印象が、それがちょうど本当のリンゴと一致するのだろうか。すなわち、私は正しくものを見ているのか。正しく外界を認識しているのか。要するに、もっと言えば、私が得ているこの知識というのは果たして正しいのか、真理なのかという、そういう非常に重大な疑問がここで出て来るわけですね。そして、さらに、この精神の物質を

分ければ、このような疑問も出て来ますね。その精神と物質が全く別の実体とするなら、その相互作用はどうなっているか。その接点はどうなっているのか。まあ「物心問題」。すなわち、私がこの今思い通りに右手を上げたかったら右手を上げる、左手で、グー・チョキ・パーとね、今私がこう自分の思い通りにこの体を動かしているわけですが、この体の動き、思い、精神ですね。精神と物質が今ここで一致して動いているわけですが、物質としての肉体とかね。しかし、別々の実体であるならば、どうやって相互作用するのか。相互作用するということは、精神と物質にもつながるような、そんな媒介が必要になるわけですがね。その媒介というのは、精神でもあり物質でもあるということで、そのようなものを認めるとするならば、とても別々の実体と分けることができないとなってきますよね。ですので、これは「物心問題」と言われる、あるいは、「心身問題」と言われる問題として残ってくる。「表象と実在の不一致」あるいは「心身問題」というのが、精神と物質を明確に分けてしまう。つまり、二元論なわけですが、二元論から生じてくる問題になります。デカルトにおいては、そもそもこれが神の属性と定義したデカルトですので、この物心問題や、そして見ているものと見られているものが果たして一致しているのかしてないのかという、この表象と実在の不一致、主客分離の問題は、デカルトにおいては、最完全者たる神が保証するということになります。そうするとですね。そもそも、デカルトのこの「我思う、ゆえに我あり」という言明は、この信仰が支配的であった世界から理性が独立の産声を上げてきた、人間理性が明確な知性を求めて独立の産声をあげたというものであったにもかかわらず、最後はまたしてもですね、このような神という超越的なもの、理性を超えて飛び越えて、超越的なものに委ねてしまうという、すなわち、デカルトの時代においてはまだまだ信仰の方が立場が、まだ力が上位であったということが言えますね。理性はまだまだその下にあった。



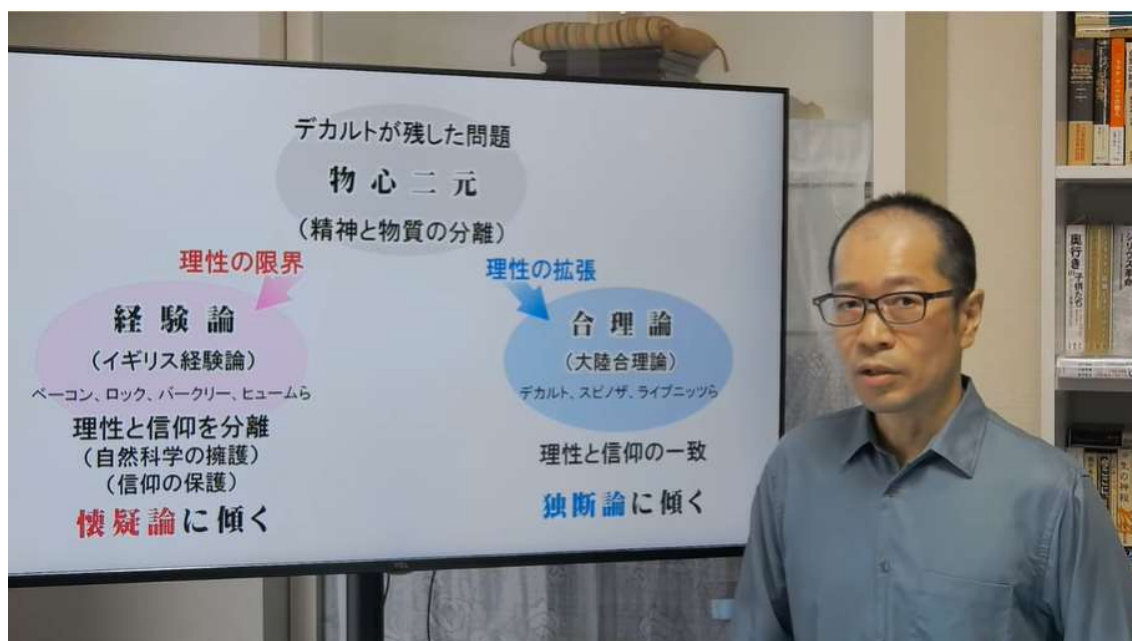
さてこのように、デカルトが定義した信仰と物質の問題なのですが、この話をする前に私の内側にはですね、まああるひとつの問題意識というものをちょっと共有したいのですが、どうして私はこの信仰と理性などというこの問題を出して来るのかという私の内側にある一つの問題意識を代弁してく

れるかのような方が、ちょうどこのフランスの思想家、ピエール・ペールという方なんですけど、時代はデカルトのすぐその後ぐらいの時代の方なんですけども、思想家であり宗教家でもありますね。キリスト教の信仰を中心として、いろいろ考えていった方なわけですが、このピエールペールの言葉にですね、このような言葉があります。彼は人間のいろいろな営みをですね、山積する資料の中から、その歴史の中から調べていったときに、このようなことを発見します。それは「墮落した信仰者の群れ」という有徳な無神論者たち」ということなんです。「墮落した信仰者の群れと有徳な無神論者たち」ということで、つまり、信仰は墮落しやすい、独断や盲目に陥りやすいわけですね。それに対して、むしろ無神論、すなわち理性ですね。理性の方が有徳に貢献している。理性のほうが有徳に貢献していくことが多いのではないかという、この問題意識ですね。文が違っていますか、そこはまあご愛嬌ということで。理性の方が有徳に貢献するのではないか。信仰は墮落しやすい。盲目や独断に陥りやすいのではないかという。これは私の中のずっと持っている問題意識であります。それゆえ、この問題意識を根底に持って私はニューソロジーの文脈で、スピリチュアル分析というふうなことをやっているわけですね。



それですね。デカルトが定義した、物心二元、精神と物質の分離、これによって心と体の総合が一体どうなっているのかという物心問題、心身問題や、表象と外在の不一致問題が出てきましたが、それを解決しようとして、その後の思想家、哲学の流れ、思考の流れにおいて、このような合理論という流れと、そして経験論という2つの相反する流れという言い方をされたりしますが、主に、フランスやドイツというヨーロッパの大陸で流れてきた、受け継がれてきた思索の流れ、大陸合理論と、そして片やイギリスにおいて流れてきた思索の流れ、経験論。これらの2つの流れがあるとよく言われますね。合理論というのは理性によって、すべて押し上がっていき、真理も究極の真理も理性の力で獲得していこうという流れかと思います。それに対して、経験論は元々理性というものも、この人間の思考活動ですね。それはそもそも外界からの人間が感覚器官を通して経験を通して得た情報、

データ・知識によって、その内側で概念を構築したりしていくものであるから、外界からそういう仕入れて来た情報によって、内側でいろいろを作り出していく概念活動、そのような理性の活動がそもそも宇宙の究極の真理とかですね。そういったものに到達し得ることはないという。極めて懐疑的な立場がこの経験論なんですね。言ってみれば、合理論の方は理性の力を拡張させているわけですね。そして、真理に到達する。理性の力を拡張させていく合理論に対する理性の限界を明確にしようとする、そのような経験論の立場ではないかと。そして、合理論の方は理性を拡張していくことによって、やがて、理性と信仰が一致するような領域を見出そうとする流れ。事実スピノザにおいては、彼の立場は汎神論。すべてに神が宿る、すべてが神であるという汎神論であると言われたり、あるいは、それが理性によって推し量っていく、理性が認識しようとする神でもありますので、理神論という言葉方もしています。そして、これはちょうど信仰者、キリスト教、あるいは、彼の場合はユダヤ教であったわけですが、その信仰の側、領域の人たちからすれば、このような理性を重視する見方というのは、明らかに無神論なんですね。信仰がないということになりますから、スピノザは大変な迫害を受けていたということをご存知かと思います。理性によって、理性と信仰の一致を見ようとするこの合理論の流れに対し、こちらがは理性の限界を通してですね、理性と信仰を明確に分離しようとする流れであったと思います。もちろん経験論というのは、そもそもこのベーコンから始まってロックもそうですが、当時出てきた自然科学、理性の力が直接観察してですね、自然の様相を観察して、それを記述し、そこから明証な、明確な知識を得ていくという、この自然科学的な手法を非常に擁護し、こちらを応援していくような、そういう思想の流れでありましたけれども、それと同時に、そのような理性の範囲が及ぶことのない信仰の領域を保護するという側面が明確にありました。ロックもそうなのですが、この特にバークリーという方においては極端な経験論、懐疑主義。もうどれくらい懐疑かと言えば、もう私がここで認識している感覚以外は信じないという。誰も見ていない森で木が倒れたとしても、それを聞く、認識する人がいなければ、音も立てず倒れると。そのような大木が倒れた音も、誰も聴いてなければ、それは音はしないのだというくらい、極端な経験論、懐疑主義を行くわけですが、それは同時に、理性の限界を通して、その理性が及ばない神への信仰を擁護しようという背景もあったということなんですね。まあそのように、理性の限界を強調しつつ信仰も保護していくという流れが、まだこの同時の経験論の中にはあったということでもあります。それで先ほどのベールの話ではないんですが、やはりこのように理性を信じるという流れは独断的な傾向にこの場合陥っていく。理性で何でもわかるということが、逆に独断的な方法へどんどんどんどん勝手に拡張していくような傾向が恐れられることに対して、こちら経験論の場合はむしろ懐疑が、疑っていく姿勢がどんどん極まって疑いすぎている。ここではまだ信仰を保護していくというようなことになっていくんですが、逆にこれが突き進んでいくことによって信仰が失われていくという方向性に向かっていくこととなります。とりあえず懐疑すぎるのではないか。片や経験論は懐疑すぎる、疑いすぎるのではないか、合理論は独断すぎるのではないかという、このような両方にやはり短所があり、そしてまた全く別々の方法論であるがゆえに、これら両者が対立するような関係にあった。それを調停した人としてですね。この後出て来ますが、カントが現れるわけですね。



**Research
Announcements**
#004

理性と信仰の一致を見出すニューソロジー 後半に続く

 武蔵野学院大学ニューソロジー研究所

announcer 川瀬 統心

(出典:【武蔵野学院大学ニューソロジー研究所】研究動画シリーズ#004
<https://www.youtube.com/watch?v=59AKeXSkp6c>)